

成果報告書

2023年 4月 1日

公益財団法人 乃村文化財団 理事長 渡辺 勝 様

貴財団の助成金事業についてご報告します。

助成区分	教育普及活動助成	
研究および教育普及活動の期間	2023年 4月 ~ 2024年 3月	
フリガナ	ヒョウゴケンリツ ヒトトシゼンハクブツカン	
大学（研究室等）名 学会・博物館名	兵庫県立人と自然の博物館	
フリガナ	ナカセ イサオ	職名
代表者名	中瀬 勲	館長
フリガナ	イトウ アキミ	職名
担当者名	衛藤 彬史	研究員
所在地	兵庫県三田市弥生が丘6丁目	
対象となる研究および教育普及活動の概要	【テーマ】	持続可能な暮らしと衣・食・住：暮らしの中の実践を促す空間設計 ～企画展「Upcycle in Hyogo」の開催に向けて～
	【目的】	暮らしに身近な衣・食・住をテーマに、アップサイクルの取組を紹介する企画展を2025年に開催する。大阪万博の開催期間とあわせ国際展示として企画し、持続可能性や循環型社会、また日本や地場産業の持つ独自性や文化的特徴を世界に発信していく。
	【実施体制】	申請者を中心に、展示企画、資料収集・整理、展示制作（協力：三橋氏）、空間デザインおよび関連イベントの企画（協力：応用芸術研究所）、広報準備、企画展に関する書籍（アップサイクル実践ハンドブック）の発刊準備、動画制作（協力：柳瀬氏）、webページ制作（協力：ヌリタシ）等を進めた。
	【実施方法】	企画展の開催に先立ち、資料収集、関係者への現地取材およびインタビュー映像の制作、展示、空間デザイン等を進める。あわせて、アップサイクルの事例を演示手法により紹介することで、来館者の行動変容につなげることを目指す。
	【成果と社会的効果】	中高生と共同でアップサイクルの実践に取組みながら、自分たちができることを発想する経験を通じ、環境問題に対する主体性や実行力を養うことが期待できる。また、開催までの準備に三田市内の大学生や博物館実習生などが展示制作に関わることで、ディスプレイの持つ重要性や意義について体感的に知り、理解を深めることができるといった実践的な学びにもつながることが期待できる。
共同研究者等の有無	—なし— あり（人数10数名） 三橋弘宗（兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員）、片木孝治（株式会社応用芸術研究所 代表取締役）、柳瀬顕（個人事業主）、徳永直美（ヌリタシ）、連蔵亮平（ヌリタシ）、ほか10数名	
助成金額	50 万円	主な使途 旅費、交通費、映像編集費

<p>研究室名 学会・博物館名</p>	<p>兵庫県立人と自然の博物館</p>
<p>テーマ</p>	<p>持続可能な暮らしと衣・食・住：暮らしの中の実践を促す空間設計 ～企画展「Upcycle in Hyogo」の開催に向けて～</p>
<p>【目的】</p> <p>暮らしに身近な衣・食・住をテーマに、アップサイクルの取組を紹介する企画展を2025年に開催する。大阪万博の開催期間とあわせ国際展示として企画し、持続可能性や循環型社会、また日本や地場産業の持つ独自性や文化的特徴を世界に発信していく。</p> <p>企画展の開催により、来館者の理解や関心を深めることとあわせて、空間づくりを通じて環境配慮行動を実践につなげていくための工夫やしかけを用意し、来館者の行動変容を促すことを狙いとする。</p> <p>環境保全と経済活動の両立がますます求められる中、アップサイクルへの関心が高まっている。「未活用な資源」や「捨てられてしまうもの」といった「もったいない」ものを活かし、アイデアやデザイン、ストーリーを加えることで新たな価値を創出する取組や商品は増加傾向にある。</p> <p>こうした中で、先駆的かつ独自性の高い取組や商品は、産地を中心に目立つ。そうした日本の伝統や文化、地場産業の中であって、循環型社会において見直されつつある世界的にも稀有な事例を空間展示等を通じて紹介する。</p>	
<p>【実施体制】</p> <p>2023年度は、申請者を中心に企画展の開催に向けた準備を進めた。具体的には、展示企画、資料収集・整理（協力：三橋氏）、関係者への現地取材およびインタビュー映像の制作、空間デザインおよび関連イベントの企画、広報準備、企画展に関する書籍の発刊準備（協力：応用芸術研究所）、動画制作（協力：柳瀬氏）、展示デザイン制作（協力：ヌリタシ）等を進めた。</p> <p>資料収集・整理は、現在雇用している研究補助者4名によるサポートも得ながら実施した。その他、館内でも総務課、生涯学習課、生涯学習推進室、企画・調整室、環境計画研究グループのメンバー等とも適宜相談・調整の上、進めた。</p>	
<p>【実施方法】</p> <p>企画展の開催に先立ち、資料収集、関係者への現地取材およびインタビュー映像の制作等を進めた。</p> <p>資料収集は、文献調査とあわせて関係者への協力依頼、ヒアリングを実施した。具体的には、播州織の工房、古布のコレクターや染もの屋、アップサイクルの実践者（西陣織産地でほどき糸を使ったアクセサリーづくりに取組むデザイナーや廃棄自動車の窓ガラス（カレット）からガラス等を作るガラス工房、県内でアップサイクルに取り組む中高生等）への取材を通じて、企画展に用いる資料を収集、整理した。あわせて、インタビューの記録映像をもとに、企画展での紹介動画を制作した。</p> <p>あわせて、アップサイクルの事例を演示手法により紹介することで、来館者の行動変容につなげることを目指す。演示とは、実物展示と合わせて、来館者との相互コミュニケーションや参加型プログラム等を通じた実演手法である。具体的には、展示に関連する主体を交えたトークセッションの実施や、聴覚と触覚、嗅覚等の五感に訴求するディスプレイ等を想定している。こうしたプログラムの企画や調整についても準備を進めた。</p>	

<p>研究室名 学会・博物館名</p>	<p>兵庫県立人と自然の博物館</p>
<p>テーマ</p>	<p>持続可能な暮らしと衣・食・住：暮らしの中の実践を促す空間設計 ～企画展「Upcycle in Hyogo」の開催に向けて～</p>
<p>【研究・教育普及活動の成果】</p>	
<p><研究面での成果></p>	
<p>アップサイクルに取り組む実践者への取材を通じて、きっかけや動機、課題や苦労に関して多くの知見が得られた。こうした知見に基づき、アップサイクルに取り組む上での入門書となるような冊子（ガイドブック）作成の機会を得た。これまで以上に多くの人を楽しみながらアップサイクルに取り組む上での一助となることを願う。 また、アップサイクル商品の事例収集と整理を通じて、モノと人の文化史という観点から、新たなフェーズに入りつつあることを予感させる研究成果を得ている。今後さらに発展させ、機を得て公表したい。</p>	
<p><教育普及活動面での成果></p>	
<p>リサイクル分野以上に個人単位での実践が容易なアップサイクル分野の特色を活かして、身近な「もったいない」ものに目を向け、工夫やアイデアを考えてみることに実践してみる面白さを、開催までの準備において関わる中高生や大学生、博物館実習生等に伝えていきたいと考えた。</p>	
<p>兵庫県立大学附属中学校では、アップサイクルをテーマにプロジェクト学習を進め、外部講師というかたちで取り組みを支援した。身近な「もったいないもの」を見つけ、アップサイクル商品を考え、実際に作ってみることに取り組んだ。余ったローソクを溶かしたシーリングスタンプ、スティックのりの空き容器とちびてしまったクレヨンを一度溶かしてから成型した「手の汚れないクレヨン」など、身近な気づきとアイデアに基づくアップサイクルの試作品が多数生まれた。</p>	
<p>三田祥雲館高校では、探究学習の中で野菜の廃棄部分や外来植物をもとにしたクレヨンづくりに挑戦しており、アドバイザーのかたちで伴走支援した。8月5日には高校生が講師となり、来館者に向けて「“もったいない”ものから生まれるクレヨンづくり体験」のセミナーを人と自然の博物館で提供した。当日のようすはC A T Vの取材もあり広く放映された。三田祥雲館高校では、次の学年にももったいないものを使ったクレヨンづくりのテーマが引き継がれており、卒業後も継続した取り組みとなることが期待できる。</p>	
<p>県内中高生と共同でアップサイクルの実践に取り組むことで、環境負荷低減や循環型社会の実現に対して自分たちができることを発想する経験を通じて、主体性や実行力を養うことができたと考えている。また、高校生が主体となったセミナーでは、学びを深めることとあわせて、自らの学びを人に伝えることにより、学びの場を提供することの面白さや難しさ、実践的な学びにもつながったのではないかと考えている。</p>	
<p>企画展の準備を通じた展示空間デザインに関する博物館実習では、受講した実習生が資料収集や企画立案に取り組んだ。うち2名が実習後も継続的に関わりたいという意向を示してくれたため、企画展の開催に向けて引き続き準備に関わってもらうことになった。</p>	
<p>あわせて、3/24（日）には、応用芸術研究所との連携のもと、京都里山SDGsラボ（ことす（KOTOS））にてアップサイクルをテーマにクリエイターおよび一般向けのイベントを実施した。</p>	
<p>これらのことを通じて、多世代的に循環型社会や環境負荷低減への理解・関心が深まることを期待できると考えている。</p>	
<p>参考資料： ハーモニー123号：高校生・大学生と連携した学びの場づくり、2023.12.</p>	

研究室名 学会・博物館名	兵庫県立人と自然の博物館
テーマ	持続可能な暮らしと衣・食・住：暮らしの中の実践を促す空間設計 ～企画展「Upcycle in Hyogo」の開催に向けて～
<p>【今後の成果の活用と活動の展開について】</p> <p>成果は、大きくは持続可能な社会の実現に貢献すると考えている。全国的に優れたアップサイクルの事例を丁寧に収集し整理し発信していくことで、環境保全と経済活動が両立した取組みとして、世界に通じる集合的なコンテンツとなることが期待できる。</p> <p>そのことで、身近な「もったいない」ものに目を向け、自ら実践し、さらに商品開発や販売を通じて取組みや考えを普及させていく人が出てくれば、アップサイクル市場の裾野を広げ、生産者を後押しし、その結果として持続可能な社会への転換がさらに促進されるといった社会的効果につながっていくと考えている。</p> <p>今年度の課題として、住に関するアップサイクルの事例収集や整理、展示デザイン、空間構成等に関する準備が不足している。今後は、住関連分野におけるアップサイクルやそれに資する技術等の紹介、住をテーマとした展示什器の制作等を通じて、さらなる展示空間の充実につなげていきたい。</p> <p>次年度は企画展開催に向けて、引き続きより具体的な準備を進めていく。また、学習コンテンツとしての普及も視野に、学校現場での試行等にも引き続き取り組んでいきたい。</p>	